

フランスの学校教育の一端

江 藤 价 泰

(法 学 部 教 授)

はじめに 今回、機会を得て5月下旬から約半年、フランスに海外出張することとなった。出発の日が迫ってくるにしたがって、そぞろに思い出されてくるのは、前任校での約2年の海外出張のときの経験である。ここで書いてみようと思うのは、そのうちの子供を現地校に通学させたことを通じてみた、フランスの学校教育の一端についての感想である。もちろん、それが非常に制約された範囲のもの——当方の語学力、就学期間等による——であることはいうまでもないことであるが、なんらかの参考になれば幸である。

転校手続 私の住んだアパルトマンは15区のはずれ、メトロのバラール＝クレトゥイユ線の発着点であるバラール駅の1つ手前のルーメル駅から2、3分のところであった。ここを選んだ理由は、すぐそばに小学校もりせもあり、またスーパーがアパルトマンの前に2つもあり、通学にも生活にも便利だったからである。

1979年の9月の半ば頃、ヴォジラールにある区役所を訪ねた。区役所に行くために地図を見たが、バラール＝クレトゥイユ線とは別の、メリ・ディスイ＝ポルト・ドゥ・ラ・シヤペル線のポルト・ドゥ・ヴェルサイユ駅に出なければならぬことが判った。結構歩くことになるな！と覚悟していったところ、4、5分で駅についた。乗ったら2つ目がヴォジラールだった。家を出て20分足らずで区役所に着いた。あらためてメトロの便利さとパリの狭さ（長径12キロ、短径9キロ）に気づかされた。

区役所は、広場に面しているが、左程大きな建物ではない、中に入って、適当に、来意を述べたところ、係を教えてくれた。あらためて子供2人、男子13歳、女子10歳をフランスの学校に2年間就学させたい旨を述べたところ、身分証明書（大ざっぱに言えば、戸籍抄本にあたる）および就学証明書の法定翻訳書、また予防注射のフランス人医師による証明書が必要なことなどを教えてくれ、関係書類をもらってその日は帰った。

出国前から、子供2人をパリの日本人学校にいれるつもりは毛頭なかったから、先輩や友人から情報を集め、一通りの書類は持参していた。しかし、法定翻訳だのフランス人医師の証明書だの面倒なことだ、と思ったのは事実であるが、大使館に相談にいたりして、なんとか書類を整えることができた。

こうして再び区役所にゆくと、子供2人とも、エコール・ファルギェールにゆくことに

なるという。しかし、さてよ、長男は、中2の1学期を終っているのに、妹と一緒に小学校に再びゆくというのはどういうことだ、と疑問に思った。さらに、近所にある小学校、リセではなく、モンパルナスの1つ手前にあるファルギェール(ヴォジラールから3つ目)にわざわざ通うことになるのもおかしい、とも思った。そこで尋ねてみてわかったことは、15区の小学校のうち、外国人にフランス語を教える特設クラスをもっているのは、この小学校だけであること、またフランスでは義務教育の上限年齢は16歳であるから、13歳(長男はその年の9月26日で14歳になるが)の少年が小学校にいても少しもおかしくないこと(小学校でも落第がある)などについて説明をうけた。もっとも、子供2人ともフランス語の知識はゼロに等しいのであるから、全くの初歩からフランス語の手ほどきをうけるのもわるくはない、と考えた。しかし、長男が、妹と一緒にのクラスになるのに抵抗を感ずるのではないか、との一抹の不安をもった。しかし、ここまで手続を進めたのだから、今さら後にはひけない、と考え、エコール・ファルギェールへの転校を承諾した。

校長の話 家に帰って、上記の事情を息子に話したところ、案ずるより生むがやすく、あっさり承諾してくれたので、一安心した。教科書類は全部貸与だというので、通学に必要な鞆などを買って学校からの連絡を待っていたところ、電話だったか手紙であったか、記憶が定かではないが、校長のブランシェ先生から父兄と子供2人と面接したいという連絡をうけた。指定された日時に、はじめてエコール・ファルギェールにいったが、ルーメル駅の近所にある小学校と同様、普通の旧式なアパートマンであった。気をつけて歩かなければ、見過してしまうような小規模な施設である。1学年、2クラス(定員25人)で40数人、全校生徒で200人を少しこえる位なのだから、これで十分ということなのだろう(小学校は5年制)。アパートマンの中庭が校庭であった。

ブランシェ先生は、40歳位、少し毛が薄くなっているが、なかなかの好男子で、感じが良かった。先生の話の要点の第一は、月・火、木・金が全日、土が半日、水は休日であること、第二に昼食は給食にするか、それとも自宅に帰ってするか、第三は、二人とも午前中はフランス語の特設クラスでフランス語の勉強をするが、午後のクラスでは、息子は五年生のクラス、娘は四年のクラスに参加すること、第四は落第があること、などであった。

おかしいことに、ここで一番問題となったのは、給食の件であった。給食を希望したところ、私の職業を聞かれた。大学教授である旨をいうと、フランスでも教えているのかという。当地では無職と答えたところ、たしか、日額一人4フラン(当時1フランは50円位)ということになった(親の収入により給食費は異なるようである)。安いので、いささか気が引けたが、有難くうけることにした。

その後は雑談で、日本人の子供の面倒をみるのは初めてであること、日本人は優秀だから

らきっと良い成績をとるであろうなどといわれて、一まず安心して帰途についた。

グルメの国の給食 10月はじめから、子供達は仲良く学校にいった。給食を選択した効用は大いにあったように思う。昼食時間を含めて、昼休は、2時間もある。食事をしながらのおしゃべり、それを終ってからの校庭での遊びは、教室における勉強よりもフランス語を身につけさせたのではないか、と考えられるからである。

それはともかくとして、給食の内容を聞いてみると、量は子供なみに少くしてあるが、フルコースで給食がなされているようであった。それは、フランス人にとって、ヨーロッパ全体がそうであるようだが、昼食が、メインの食事となることによるのかもしれない。スープからデザートまで、日本の給食とは比較にならない食事なので、子供達は大いに満足しているようであった。

ところが、ある日のこと、娘が帰ってきて今日の給食は気持悪かったという、聞くと、大変に肉がおいしかったのだが、友達がこれは何か知っているかというので、知らないと答えたところ、ラングだといわれた。生憎、娘は、ラングの意味は、「言語」としか知らなかったもので、変なことをいうと思っていたところ、その友達が、舌をペロリとだして、この肉は、牛の舌だといったので、とたんに食べられなくなってしまった、というのである。

娘の気持悪いということもわかるが、さすがにグルメの国の給食と思うとともに、食文化の差をあらためて考えさせられた次第であった。

給食に関連していうと、息子は、翌年6月に無事エコール・ファルギェールを卒業して(2度小学校卒業という妙なことになった)、リセ・ビュフォンに進学することになった。もっとも、正確には、リセ・ビュフォンに併設されているコレージュ(中学)に進学したのであるが、この進学に当って、副校長の面接があった。副校長は、息子のためにメニューを作ってやろう、といわれた。メニューは、いわゆるメニューであるから、妙なことをいうな、と思っていたところ、フランス語は1年、英語は2年、数学は4年という具合に、ファルギェールから送られてきている書類を見ながら、息子のための特別の時間割を作ってくれた。よくよく考えてみれば、勉強は、頭の食事ともいうべきものだから、言いえて妙だと改めて思うとともに、さすがにグルメのフランス人にふさわしい発想とこれには感心した。

もっとも、息子は、帰る年(1981年)の正月から4年のクラスに全面的に編入され、無事卒業できたのであるが、4年になって彼が、一番喜んだ理由は、若干冗談めかしていうと、後で知ったのであるが、給食のときに、小瓶のビールが2人に1本の割でついていたことにあるようであった。およそ、これはわが国では考えられないことである。フランス人にとって、ビールは清涼飲料水の種類なのかもしれない。

飛び級 前述のムニユからも判るように、フランスには、飛び級がある。それどころか、入学でも、満5歳になって知脳が進んでいけば、親の申出によって1年早く就学することができる。もちろん、この場合、どこの国にも親馬鹿がいるから、親の判断だけでは駄目で、校長が面接して、最終的な決定を下すことになる。

飛び級の反面、小学校から落第がある。娘のクラスにも2回落第した生徒がおり、彼女が卒業したときに、3回目の落第をして、ついに卒業できなかったということである。義務教育の上限年齢は、前記のように16歳であるから、16歳に達すると、学年、学校のいかに問わずに学校を去ることになる。なんとも厳しいことである。落第率は、小学校で5パーセント位といわれている。

クラス編成 たしかに、落第は厳しいことであるが、フランスの小学校のクラスは、前述のように25人、中学でも多くて35人であるから、相当にきめ細かい教育、個別指導が行なわれているとあってよいであろう。このことは、息子や娘をみていて実感できることであった。それは帰るところ、ひとりひとりの生徒の個性と能力とを育てるのを教育者の本務と考えている先生が、わが国よりもフランスの方が多からではないだろうか。

わが国の教育は、その字義の教え育てることからほど遠く、いかに生徒を規制し、管理するか、に重点がおかれているように思われる。その結果、教える者と学ぶ者との間の人間的交流が欠如することになり、およそ考えられないような体罰、暴行が横行することになってしまっている、果してこれで良いのであろうか。寒心にたえないところである。

ファルギエールのクラスの中には、息子や娘も含めて、いろいろな国籍や人種の生徒がいたが、息子や娘が先生からも友達からも、偏見なく受けいれられていたことは幸せであった。現在でも、息子も娘も、先生や友達と文通したり、機会をとらえては会ったりしている。これは、日本人学校に入学した場合には、およそ経験しえないことであつたらう。

校長先生 ブランシェ先生は、校内のアパートマンに住んでいた。校長が校内に住むというのは、フランスでは普通のことのようである。一説によれば、これは中世以来の学寮の伝統、すなわち、教える者も学ぶ者も一緒に住み、学び合うという伝統によるといわれている。

それはともかくとして、息子のリセ進学についての連絡をうけ、子供達と一緒に学校にいったところ、校長は、登校してくる生徒たちの一人一人と握手をしたり、君は数学をもっと勉強しなければいけないとか、大忙しであった。この風景をみていて、校長が実によく生徒を知っているのに感心した。小さな学校だから、できることなのかもしれないとも思ったが、それだけでないことはいうまでもないことであらう。

校長室で、いろいろと連絡をうけた後、大変ですね、ということからはじまり、校長の

仕事内容を聞いたところ、校長が学校事務の相当部分を担当していることに驚いた。たとえば、前述の給食費を各クラス担任から受取り、未納者を確認し、その納付を催告する等は、校長の仕事である。また病欠の先生が出れば、その授業を代ってすることも多々ある、という。校長は、わが国では、管理者として位置づけられているが、少なくとも、ファルギェールの校長は、そうではない。教員兼事務員というところであり、相当の激務をこなしている、といってよいであろう。ここには、学校事務も教育の一環という思想があるのかもしれない。いろいろ聞いてみると、フランスの小学校長は、このような職務を行っているのが普通のようなのである。

なお、ブランシェ先生は、独立単組であるF・E・N（全国教職員組合）の組合員である、ということであった。このことも、わが国とは全く違うことである。

学校の規則 わが国では、小中高校また国公私立を問わず、むやみに規則づくめになっている。とくに、中学、高校では、服装はもちろんのこと、髪型、髪長さ、スカートの長さまで、微に入り細をうがって規制している。またこれに対する制裁も相当に手厳しく行なわれているのが現実のようだ。このような現象は、ここ20年来、ますますひどくなっているようである。それは、敗戦前の旧制の小・中学校のそれよりもはるかに厳しいといえる。

ところが、フランスでは、このようなことは全くなかった。それどころか、学校には儀式らしいもの、たとえば入学式とか卒業式もなかった。新学期の第1日目から授業がはじまり、最後の日の授業でそのまま終る。丁度それは、電車や列車が、時間が来ると、ベルも鳴らさずに静かに発車し、停車するのとよく似ている。学校には、いわゆるけじめが全くない。

日仏のこの差異は何によるのであろうか。難しい問題であるが、フランスと異なり、個の自立、確立を教育の場において図るよりも、わが国では、規則また管理を通じての学校への帰属意識の醸成が、個の埋没が、図られていることに原因がある、と一まず答えることができるように思われる。それは、ひいては長じて社会に出てから、国家はもちろんのこと、企業等の多種・多様な集団への帰属を容易にさせる下地の形成が図られていることでもあるといえよう。

おわりに いずれにしても、冒頭で述べたように、全く限定された狭い経験に基づいてのフランスの学校教育の一端についての紹介であるから、これをもって全斑を推すことはできないかもしれない。しかし、日仏の初等・中等教育の間には、相当な思想的へだたりがあることは否定できないように考えられる。